

未完成画《雨中美人》の発見

平成 27 年 1 月末、特別展「創造の源泉－菱田春草のスケッチ」の準備のため、菱田春草ご遺族の資料を調査したところ、屏風から剥がした状態の未完成画 12 枚を発見し、これらが今まで知られていなかった未完成屏風の《雨中美人》であることを確認した。

菱田春草の幻の出品画《雨中美人》

- ①左隻に和傘をさした 2 人の人物、右隻に和傘をさした 4 人の人物が描かれる。
- ②左隻の右端、右隻へと続く画面の下方には道と思われる灰色の彩色がある。
- ③右隻の中央付近の人物にはねずみ色がかった藍色（お納戸色）の彩色が施されている。
- ④資料写真でははっきり見えないがうっすらと 4 本の柳の木が描かれている。
- ⑤黒い部分は墨、鉛筆、木炭。彩色の部分は日本顔料で描かれている。
- ⑥各紙の裏は屏風から剥がした糊あとがある。



左隻 165.0×366.9 cm



右隻 165.0×366.1 cm

《雨中美人》の制作をめぐる春草親族の回想

－未完成に終わりながら印象深い作品であったのか多くの人が語っている

①菱田千代（春草夫人） 『思ひ出づるまゝに』（草稿）

私がモデルとなり、座敷の中を足駄をはき雨傘をさして歩き、よしといふ所をとまれと申され、片足は足駄の前歯だけ下についている様な時にとまれといわれ、其ままでじつとして居れば足はブルブルふるえ、動くな動くなといはればかたくなり、なれぬ事とて気分悪くなり、いく度か葡萄酒を呑んではやりなおし、幾枚かの写生をいたし屏風にかかりましたが、着物の色が思ふ様に行かないと止めてしまい出品の日数も迫つてきましたので、終に小さいものにしてしまい黒き猫が出来た譯で御座います。其翌年の春頃より体の工合わるく早春の屏風を描きて後は薬もとらず病勢も一進一退の状態でおりましたが、こんど治つたらすばらしいものが出来るぞと始終申しておりました中へ、もう一度快くなり懐心の制作が出来る事を祈っておりましたが終に其事を果さず逝きました事は誠に残念で御座います。

②青山準（春草の妹） 山田房三『春草って誰か』昭和33年（1958）

これをかく時に姉は神田の髪結に行き日本髪をきちんと結い、着物をちゃんと着ていました。その美しい姉の姿を忘れません。

③菱田春夫（春草の長男） 『父・春草の思い出』昭和26年（1951）

明治四三年は、文展の審査委員をお請けしました事で、じぶんでも幾分気張ったものを描くつもりだったのでしょう、六曲一双を用意して、秋雨に散る柳の落葉を踏んでかさをさして三人の美人が行く絵にかかったものでした。この際も、特別の写生というほどのことではありませんが、人物の姿勢や配置の上に図を練ったものでしょう、母をモデルにして、暑い夏の日盛りにかさをさして、ああでもない、こうでもない、そっちへ立て、こちらを向けといつては、ついに母に脳貧血をおこさせたことなどもありました。しかしこの絵は、着物の色がどうしても自分の思うようにならないので、三分の一ぐらいできながら中止してしまい、尺八の豎物を画面に、例の「黒き猫」の図にかかることになったのでした。

④高橋鍊逸（春草の従兄弟） 高橋鍊逸の原稿

黒き猫のいわれはこうである。春草は突拍子もないものを画くが、その頃当世美人春雨傘をさして橋を渡る六曲屏風、これは奥さんのお千代さんをモデルにしたものだったが、或所まで行った所、着物を御納戸色にするのが気に入らず、そうすると出品会の期日に間に合はないので黒き猫に取掛った。